

埋もれた原石 収益の源泉

和製ヘッジファンド ハヤテ



▷1

ヘッジファンドは高度な取引手法を駆使し、どんな市場環境でもプラスの収益を旨とする投資家だ。機関投資家や富裕層からお金を集めて運用する。堅い守秘義務があるため秘密のベールに包まれているイメージも漂っている。どんな戦略で投資収益を上げているのか。ある和製ヘッジファンドとその経営者の素顔に迫った。

果敢にリスク、企業と共栄

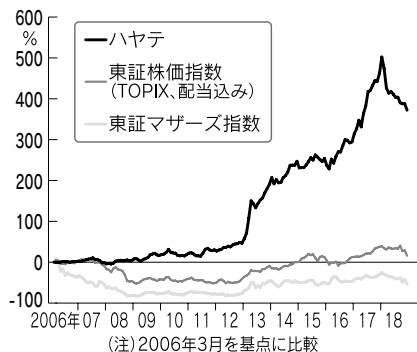


ハヤテはチームで情報を共有し投資戦略を練る(中央が杉原氏)

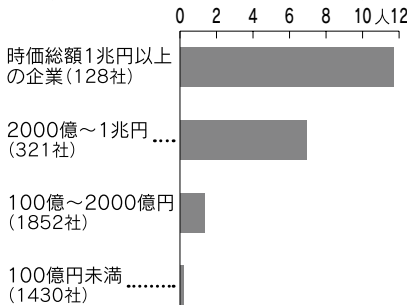
チーム主義

株の街、東京都中央区の兜町。東京証券取引所のすぐ隣のビルに、日々、市場と対峙するヘッジフ

ハヤテの運用成績は市場平均を大きく上回る



証券会社の企業分析は大企業に偏りがち(企業規模別のアナリストのカバー数)



アンドがいる。ハヤテインベストメントだ。「では、始めましょう」。2月中旬、朝7時15分。創業者でファンド代表を務める杉原洋(41)のひとことで、恒例の朝会がはじまった。国内の運用会社や証券大手から引き抜かれてきた3人のアナリストたちの表情が引き締まる。

ハヤテは杉原が2005年に立ち上げた。運用資産は200億円弱。日本の個別企業の買いと空売りを組み合わせた投資戦略を採用する。特筆すべきは年率で平均13%という投資リターンだ。連年、高いリターンを上げてきたが、運用額は200億円弱とまだ小さく、営業はかねての課題だ。今はファンドへの資金の出し手の約9割が海外勢だが、今後は日本の機関投資家を開拓する狙いがある。

市場を活性化 日本回帰にはもう一つの理由がある。「日本が世界の中でこれ以上地盤沈下していくことに耐えられなくなった」との思いだ。杉原は日本が競争力を失ったのは、投資家の責

任も大きいと感じている。日本企業にリスクマナーを供給し、資本効率の改善を促しながら世界で戦える状態にする。その企業と投資家の対話を通じた協働こそが必要なのに、日本は年金基金も金融機関もリスクを取ってこなかった。「リスクマネーの幹を太くして、世界で戦えるような日本企業とウィンウィンの関係を築きたい」。杉原は語る。

だが、ファンドを取り巻く環境は良好とはいえない。昨年は米利上げを巡る危機モードが高まり、割安な中小企業株が一斉に売られ、割高のものの上がるマネーの逆転現象が起きた。日本でも「有力なヘッジファンドのいくつかが閉鎖に追い込まれた」(みずほ証券の菊地正俊チーフ株式ストラテジスト)。

ハヤテも昨年は投資損益が前年比でマイナスになった。過去13年でマイナスになったのは、07年と18年の2回しかない。企業調査が機能しにくい市場の現実には、「無力感に支配された」と杉原は打ち明ける。今年になっても、現金比率を高めにする非常時モードを続けている。

無人化する自動取引が主流になる市場で、愚直な企業調査が機能しにくくなっていく可能性もゼロではない。埋もれた日本企業を発掘し、成長のギアチェンジを促す。そんな理想を杉原はどこまで形にしているのか。日本の資本市場の活性化は、投資家の果敢な挑戦なくして実現はできない。敬称略(川上穂)

許諾番号30068423 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。日本経済新聞社は、記事内容により、特定の企業・団体や商品・サービスの購入・投資等を推奨するものではありません。

HAYATE

お問い合わせ先 ハヤテインベストメント株式会社
経営企画本部 (03-3527-3074 / info@hayate.co.jp)
〒103-0026 東京都中央区日本橋兜町 6-5 兜町第 6 平和ビル 2 階